

# 本学周辺の遺跡について

## ——環境教育の視点から——

小 野 由美子

(本学—地域研究員)

### はじめに

環境とは、「四囲の外界。周囲の事物。特に人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うところの外界。」(広辞苑)を指す。環境問題に取り組む場合でも、自分の住んでいるところはどのようなところなのかを把握しておくことは、非常に大切である。「相互作用を及ぼし合う」のは、現在の事物とは限らない。過去の事物、たとえば遺跡も、私達の精神生活に多大の影響を及ぼす。よって本稿では、最初に本学周辺の遺跡を簡単に紹介する。そして、それらを題材として、一般住民を対象にした環境教育にどう生かすかを、「遺跡見学会」という実践報告を交えながら、提示してみたい。

## I. 本学周辺の遺跡

### 1. 自然環境と社会環境

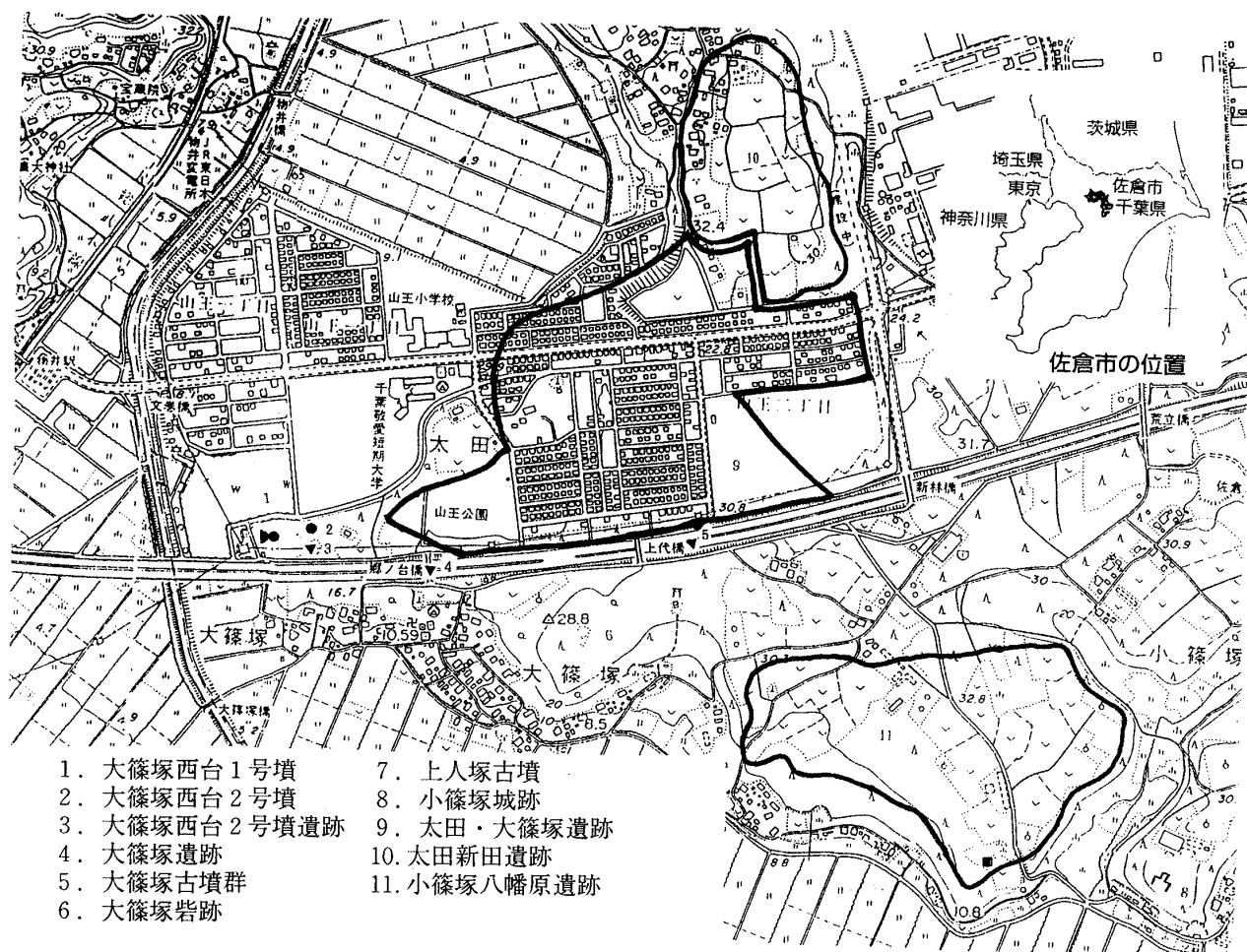
本学は、千葉県北部に広がる下総台地に囲まれ、ほぼ中央部に位置する。印旛沼に流れ込む諸河川の一つに鹿島川がある。この川の源流は、千葉市昭和の森付近の山中にある。流域には水田が開け、いくつもの小川と合流しながら水田

の規模を広げ、本学西側で北へ大きく蛇行し、佐倉市の市街地を流れる高崎川と合流して、印旛沼に注いでいる。本稿で取り上げた遺跡が点在する台地は、鹿島川河谷、高崎川河谷と呼ぶにふさわしい。鹿島川河谷と高崎川河谷によって形成される台地は広大で、若干の起伏を認める。各河谷の支谷が入り組んで沢を形成し、所々に小規模の舌状台地を形成していた。

本学が位置している山王地区は、J R 成田線物井駅前に広がり、開発面積は659,055m<sup>2</sup>となっている。台地を崩し、土地改良した鹿島川流域の湿田地帯とを一本の道路で結び、一つのまちを造り上げたもので、入居戸数およそ900戸と小規模である。行政区画としては、佐倉市の南西、根郷地区に属し、佐倉市中心部より離れていることもあって、住民の生活は鹿島川をはさんだ四街道市との関係も深い。本学南側に、東関東自動車道が台地を横切って東西に走っている。

### 2. 台地上に点在する遺跡

台地上に点在する遺跡は、図1の通りである。洪水の害から家を守るすべもなかったので、暮らしの舞台は台地上であった。よってほとんどの遺跡は台地上から散見される。では、これら



の遺跡を簡単に紹介する。

図1 本学周辺の主な遺跡

## 2. 1 大篠塚西台1号墳

本学斜面林内にある前方後円墳で、全長約35～42m、後円部径約20m、高さ約3.25m。舌状台地の先端に位置し、当時鹿島川を行き来した船にもその偉容を誇ったと思われる。古墳はその一族の権力を誇示するという重要な役割があったので、見晴らしのいい一等地を占めることが出来たということは、既にそれ相応の権力集中が行われていたことを示す。時代区分につい

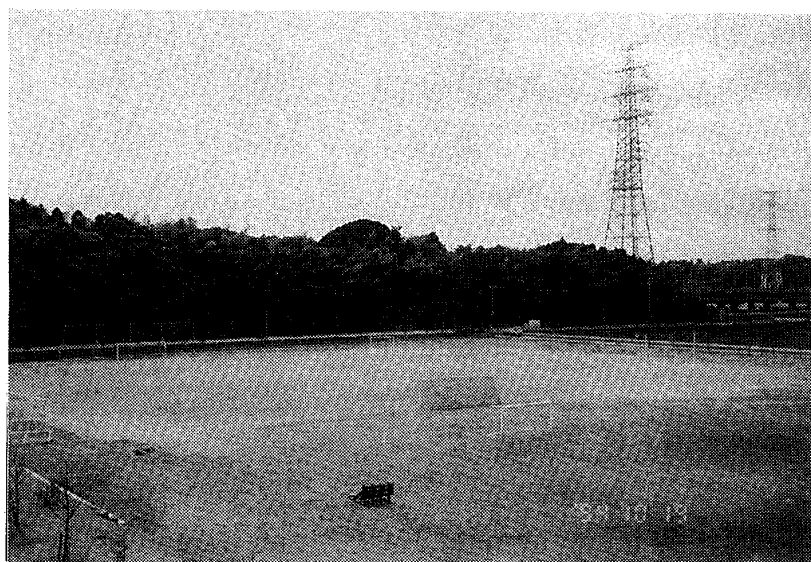


写真1 大篠塚西台1・2号墳遠景（北側）

本学研究棟3階屋上より撮る。

手前は本学グラウンド（1994年10月筆者撮影）



写真2 大篠塚西台2号墳

南側より撮る。住宅建設に先立つ発掘調査直前のようす。  
こんもり見える木はスダジイ。(1995年2月筆者撮影)

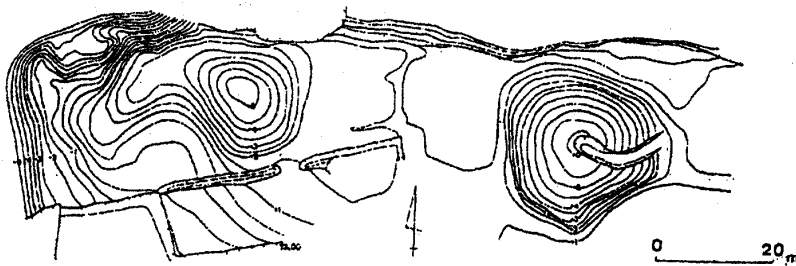


図2 大篠塚西台1号墳、2号墳測量図  
(注) (18)P. 28より転載

ては、古墳時代後半という説が有力だが、確定はしていない。昭和57年に、國學院大学考古学研究会が測量調査を実施したのみで、その後文献に登場することなく、隣接する2号墳との関連など詳しいことはわかっていない。

## 2. 2 大篠塚西台2号墳

後述する2号墳遺跡の発掘によって、1号墳よりは現在得られている情報量は多い。

円墳で径35m、高さ4.5m。築造時代区分、推定古墳時代前期(4世紀)。

佐倉市内の古墳の中でも最大級の大きさでありながら、中世の地下式墓構築等のために南側

が削り取られ、いびつな形をしている。築造された当時は空堀が一周する立派なものであった。この空堀を「古墳の周溝」と言う。周溝の中から古墳時代前期の壺型土器が出土したので、古墳築造の年代は4世紀と推定されている。但し、古墳そのものの調査ではないので、推定の域を出ない。この堀から出た土を盛って古墳を造っていく。土木機器もない時代に、4.5mもの高さに盛り土をするのは、多量の労力を要したと想像される。この時代既に、それ相応の権力の集中が完了し、地方豪族が存在していたことを示している。

## 2. 3 大篠塚西台2号墳遺跡

個人住宅建設に先立って、1995年5月1日より5月31日まで、発掘調査が行われた。前述の大篠塚西台2

号墳に隣接する400㎡の竹林と畑地が対象であった。

### ○調査の結果検出した遺構

- |         |            |
|---------|------------|
| ・古墳の周溝  | 1条         |
|         | ……………前述の通り |
| ・住居址    | 1軒         |
| ・地下式墓   | 3基         |
| ・台地整形区画 | 1カ所        |

### ●住居址

奈良・平安時代の竪穴住居が1軒確認された。古墳の周溝の上に造られている。集落と墓域は区別されていた時代にもかかわらず、

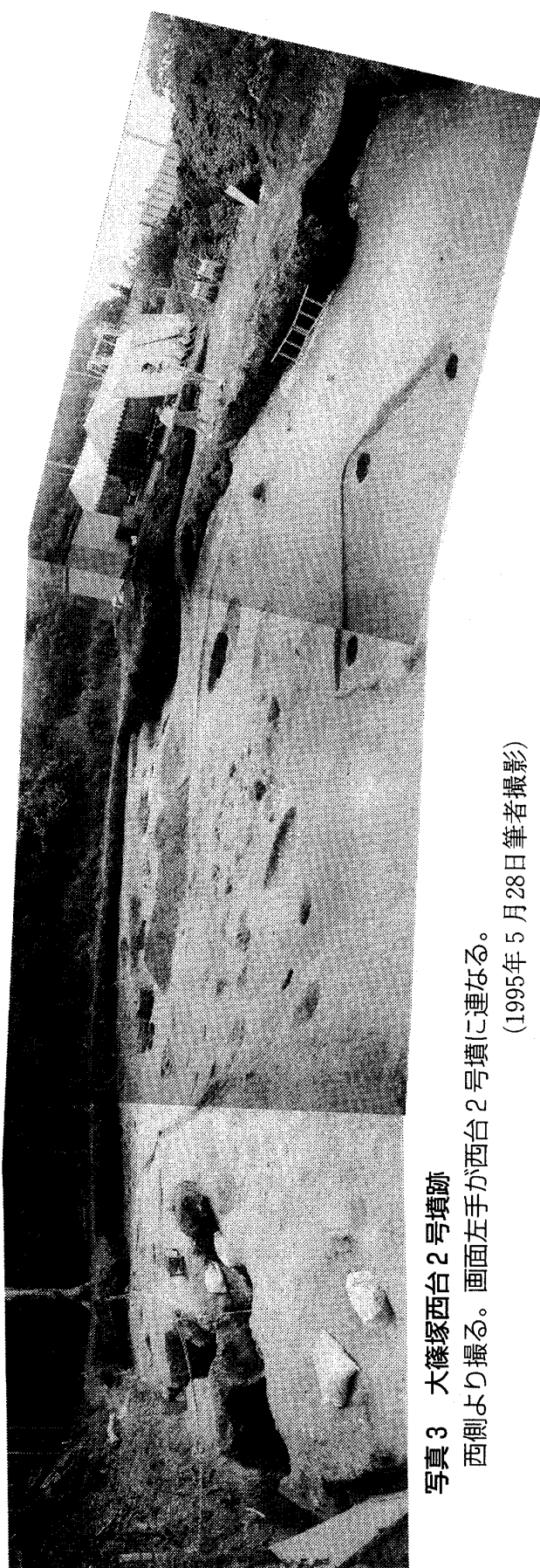


写真 3 大篠塚西台 2 号墳跡

西側より撮る。画面左手が西台 2 号墳に連なる。

(1995 年 5 月 28 日筆者撮影)

なぜこのような場所に建てたのかは不明である。

### ●地下式墓・台地整形区画

中世 (16 世紀) に造られたと考えられる半地下式の墓。形態的には L 字形に掘り込んだ遺構に遺体を安置したと言われている。副葬品はないが、同じ敷地から底のない土器が出土した。底をくり抜いた器は、当時死者を弔うためにお供えに使われたことが知られている。酸性土壌のため遺骨は全く残っていなかった。最近までの研究では、地下式墓の大部分は副葬品が出土しないことから、遺体を一時的に安置し、白骨化した後に別の墓に埋葬したのではないかと考えられてきたそう。しかし、再度埋葬する予定があるのにこれだけの労力を費やす必要があったのか疑問が残るとする意見も、有力である。

台地整形区画とは字のごとく、本来の地形に手を加え、「整形」を行っていることを意味する。なぜこのようなことをしたのかはわかっていないが、台地整形の下には墓が造られていることが多い。現在で言う「霊園」のようなものである。葬られた人々の数はどの

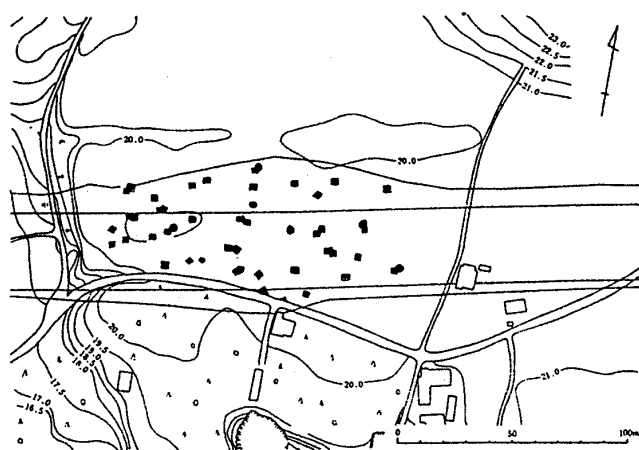


図 3 大篠塚遺跡付近実測図

(注) (3)P. 3 より転載

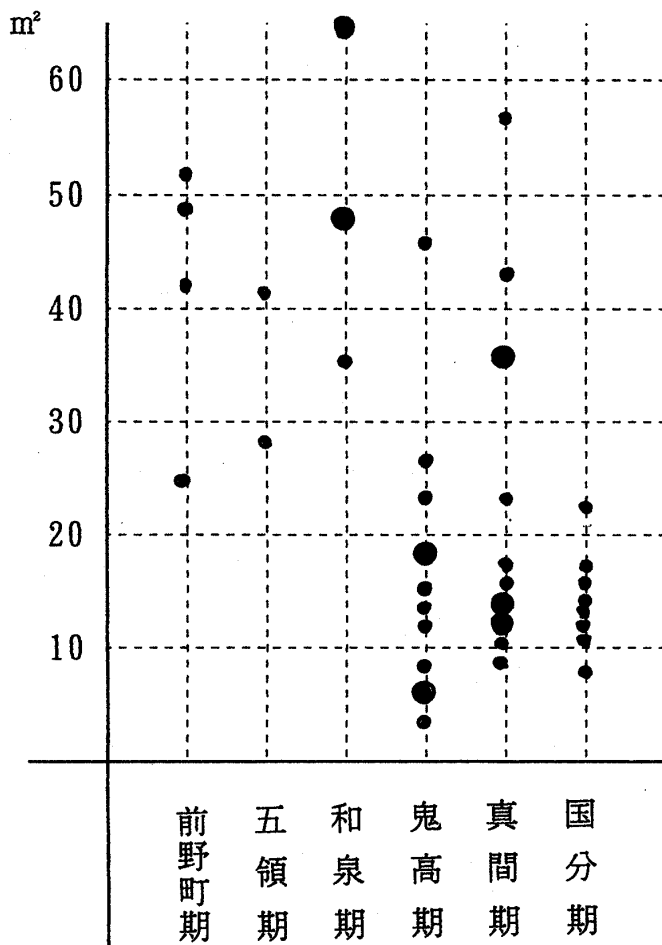


図4 住居の床面積比較 —大篠塚遺跡の場合—  
51址のうち、時期の確定している42址について比較。およその床面積は資料より筆者が算出した。

る場所が別立てのやり方である。この遺跡からちょうど南へ5 kmに弥富地区宮内というところがある。「うめる方をソトラントといい、石をたてる方をイシラントとか、ウチラントと言っている。……宮内では共有の埋葬墓地が一カ所あり、雑木でかこまれた中にある。……ここは塚を築かないので埋めたあとは平である。」

大篠塚地区の草分けは千葉氏一族等とその帰農者とされている。中世の人々の暮らしぶりについては葬送の儀式も含め、今後の研究に譲りたい。

くらいで、身分はどの程度だったのだろうか。関連があるかどうかかわからないが、『佐倉市史民俗編』に葬制の風習<sup>(2)</sup>について興味深い記述がある。それは「両葬制」といい、埋葬する場所と墓石を建て

#### 土器以外の遺物

##### 石製模造品

- ・緑灰色の緑泥片岩製
- ・扁平な
- ・緑黒色の緑泥片岩製
- ・濃緑黒色の緑泥片岩製
- ・緑灰色の滑石製
- ・碧玉製
- ・青灰色の雲母片岩製
- ・雲母片岩製
- ・滑石製

- |        |         |
|--------|---------|
| 剣形品    | 第5号住居址  |
| 剣形品    | 第45号住居址 |
| 剣形品    | 第48号住居址 |
| 曲玉     | 第5号住居址  |
| 曲玉     | 第44号住居址 |
| 曲玉     | 第48号住居址 |
| 双孔有孔円板 | 第23号住居址 |
| 双孔有孔円板 | 第45号住居址 |
| 紡錘車    | 第45号住居址 |

##### 管玉状土製品

- ・土器と同一胎土の管玉

第50住居址

##### 貝殻

「充滿土下端から蛤を中心とする貝殻が出土し、本址に伴出するか否かで問題となったが、充滿土の堆積状況を考慮して、直接伴わないが時期的には近似すると云う結論に達した。」<sup>(4)</sup>

第24号住居址

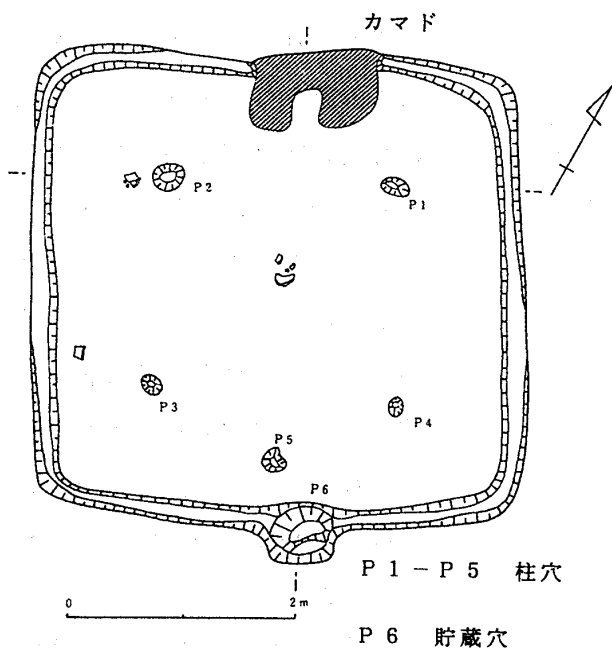


図5 大篠塚遺跡第1号住居址実測図

(注) (3)P.3より転載

奈良・平安時代の典型的な庶民の住宅。  
正方形に近い竪穴式で、カマド・貯蔵穴  
が見られる。

## 2. 4 大篠塚遺跡

東関東自動車道建設に先立ち、昭和45年3月下旬から4月30日まで発掘調査が行われた。いくつかの点在する遺跡のうち台地の最も突端にある。実測図の通り住居址51軒が検出され、これらの時代区分は前野町式から国分式（古墳時から平安時代）とされ、このように長期に集落が存在したことは注目に値する。出土品としては、土師器、須恵器多数（合わせて631個体、墨書土器1点—第11号住居址より出土—を含む）、土器以外の遺物は前頁の表の通りである。

時代区分が明確にされている住居について床面積を調べてみた(図4)。グラフにしてみると、時代が新しくなるに連れて、床面積は縮小傾向にあることがはっきり読みとれる。要因としては、古墳時代には一棟の居住施設として完結し

ていたものが、だんだん機能分化が進んだのではないかと考えられている。また、一つの建物に居住する血縁者の範囲が狭くなったのかもしれない。稲作の定着と共に、財産の蓄積をめざす民衆が増加した時期でもある。台地深奥部への移動に伴い、集落の人口が減少したのかもしれない。

古墳時代とは弥生時代に続く時代で、3世紀末から7世紀後半までのおよそ400年間のことを指す。考古学の分野ではこの時代を前・中・後期の3時期に分け、それぞれ五領期・和泉期・鬼高期と呼んでいる。大篠塚西台2号墳の築造年代は4世紀、後述する大篠塚2号墳（2.5.2項 参照）の築造年代は7世紀と推定されていることから、五領期、鬼高期の住宅に住んでいた人々はそれぞれ、古墳築造にかり出されたのかもしれない。

奈良・平安時代の一般民衆の住居は、竪穴式で形は正方形に近くカマドが設置されていた。竪穴住居は縄文時代から連綿と受け継がれてきた形態である。域内では掘立柱建物が住宅として採用され貴族が誕生するような時代となっても、一般民衆の住宅事情は依然として竪穴式

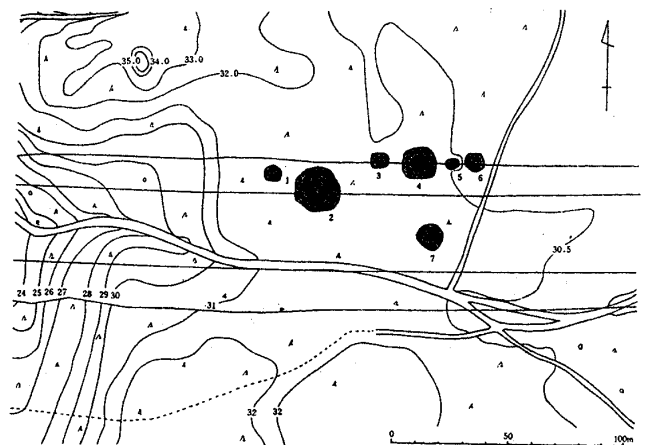


図6 大篠塚古墳群付近実測図(その1)

(注) (3)P.89より転載

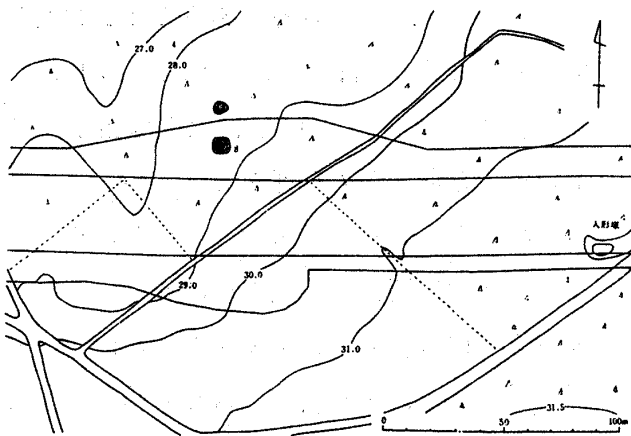


図7 大篠塚古墳群付近実測図（その2）  
（注）(3)P.90より転載

だった。但し、住宅には改良が加えられ、なかでも画期的な変化はカマドの出現であった。煙道を伴ったカマドが出現して、効果的な燃焼処理に工夫がこらされた。また、カマド付近に貯蔵穴と呼ばれている小さい穴が掘られ、食生活の発展をうかがい知ることができる。つまり台所と呼んでいいコーナーが誕生したのである。

とはいうものの生活の実態は、ゆとりある生活とは言い難い。それは、生産力の低さよりも、収奪のきびしさによるところが多い。701年の大宝律令以降様々な法律が作られ、想像以上に効力を発揮したようだ。正倉院に残されている布の中には、千葉県から調や庸として運ばれた布が多くあるそうだ。この遺跡からただ1点出

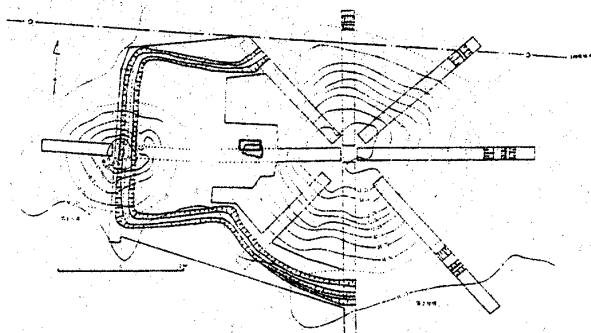


図8 大篠塚古墳群第1-2号墳  
墳丘平面図

（注）(3)P.91より転載  
くびれ部に内部施設とかく乱あとが見える。

土した紡錘車も、自分の衣服を紡ぐというよりは貢納品の生産に使ったのではあるまいか。

律令制が確立されて以降の一般民衆の暮らしぶりは、華やかな貴族生活とは全く別世界の厳しいものだった。この事実を、大篠塚遺跡は遺物と遺構で明確に描き出しており、当時の様子を知ることができる貴重な資料となっている。

## 2.5 大篠塚古墳群

大篠塚という地名は、篠が群生し古墳が点在していたことから来ており、篠塚という一つの村を、大きな古墳のある村—大篠塚と、小さな古墳のある村—小篠塚に分けたと言われている。<sup>(5)</sup>

古墳群という名の通り、ここで取り上げるのは9基である。東関道の建設に伴いすべて消失しているので、記録保存のみが頼りである。詳細を知りたい場合は文献に直接当たればよいので、ここでは概略のみ記す。<sup>(6)</sup>

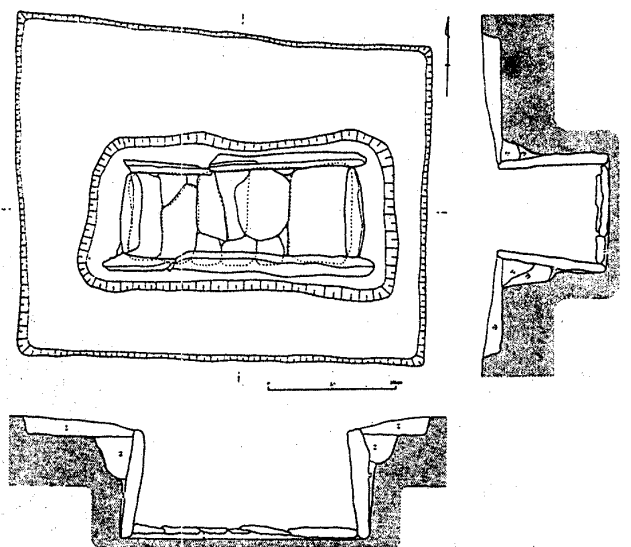


図9 大篠塚第2号墳石棺実測図  
（注）(3)P.94より転載



## 2. 5. 1 第1、第3－8号墳

中世、山岳信仰の塚。

昔、第7号墳の近くに石碑があり、その内容を知る者からの伝聞「『月山…講中…先達某』の文字は、一段と大きかったので、判読できた。」

よって各々の墳丘は、山岳信仰の所産といえる。<sup>(7)</sup> 墳丘の築造時期は、塚の築造が盛行したといわれる中世を一応の目安とする。

## 2. 5. 2 第2号墳

推定築造時期古墳時代後期（7世紀）の帆立貝式前方後円墳。

本墳丘：主軸長約30m、後円部径約22m、前方部幅約14m、くびれ部幅約12m。周溝と箱式石棺を伴う。

遺物 銀環1、直刀残欠1、刀子残欠1、鉄鏃残欠4、頭骨片、歯等

「本墳丘は、昭和14年頃、ボッカ（本根）を掘った時、石の棺にあたり、中からまっすぐな刀や、骨などが出ている（地元民談）ので、調査前から石棺を伴う古墳であることが知られていた。石棺発見当時の直刀、人骨等の行方は、知る者がいないので散逸したと考えられる。」<sup>(8)</sup>

「出土した人骨および人歯は少なくとも3個体に属し、そのうちの1体は2歳前後の幼児であり、他の2体は壮年中期の男性と壮年初期の女性である可能性を想定することが出来る。」<sup>(9)</sup>

箱式石棺は、主軸線上の墳端部（くびれ部）より検出した。人骨

及び歯の鑑定から、合葬であることが判明している。また、西台1号墳（2. 1項）、人形塚古墳（2. 5. 3項）、上人塚古墳（2. 7項）…と群集墳の形態をとっている。これらの特徴から、常総型古墳の一つといえる。

古墳時代後期に、墳丘の裾部やテラスに埋葬施設を持つ古墳が、常陸から下総にかけて、分布していることは広く知られていた。この常総型古墳の特徴は以下の5つである。

- (1) 内部施設が墳丘裾部に位置すること。
- (2) 内部施設は通常偏平な板石を用いた箱式石棺であること。
- (3) 合葬（追葬）を普通とすること。
- (4) 群集墳を形成していること。
- (5) 東関東中央部に分布すること。

このような特徴を持つに至った要因の一つに、6世紀半ば以降に常総地域へ、横穴式石室が波及したことが挙げられている。横穴式石室は、墳丘の中腹、あるいは裾部に入口を持つ内部施設として、従来の形式とは全く異なる位置に主体部を移している。この影響で、

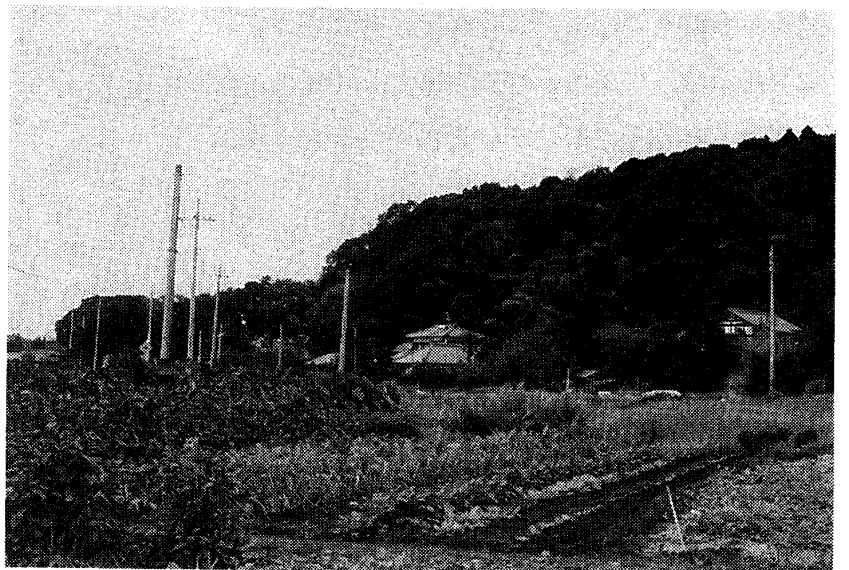


写真4 大篠塚砦跡遠景  
(1994年11月筆者撮影)





写真5 上人塚古墳  
(1994年12月筆者撮影)

墳丘裾部へ主要な内部施設を築くという形式を定着させたと言われている。

### 2. 5. 3 人形塚古墳

一辺11mの周溝をもつ方墳、主体部は確認されず、副葬品の検出もなし、よって時代決定は困難。

この塚の特徴は墳丘の形態にあるのではなく、「人形送り」という民俗行事との関連において重要である。

人形送りとは、千葉県や茨城県を中心に行われていた年中行事の一種で、大篠塚では5月27日に子供行事として行われていた。「長さ2mくらいの細竹の先にわら人形を付け、その下に餡の入った丸餅を、つとにつつんで縛り付けて畑に立てる。わら人形には紙で作ったよろいやかぶとが着けてある。子供達はそろそろ人形のついた竹で打ち合いをしたり、餅を食べたりして遊んだ。」<sup>(10)</sup>子供達が打ち合いをした場所が、人形塚であったと思わ

れる。

佐倉市の中でも大篠塚の所属する根郷地区では、すべての地域で行われていたもようである。根郷地区の城<sup>じょう</sup>では、戦時中の物資不足で廃れたそうで、他の地区も廃止時期を同じくしているのだろうか。現在大篠塚では行われていない。

戦国の世では戦がいったん始まれば、農民もさむらいも区別はないから、安穏と農作業に従事できなかった。無事田植えが終了することを祈念し、戦は人形にさせて何事もなきことを願ったのであろう。

### 2. 6 大篠塚砦跡

中世の砦跡。字竜替にあり、土塁や空堀の遺構を残していると言われている。「伝承によると、13世紀頃、千葉氏の武将篠塚伊賀守が篠塚城を築き、大篠塚に砦をおき館を構え居住して

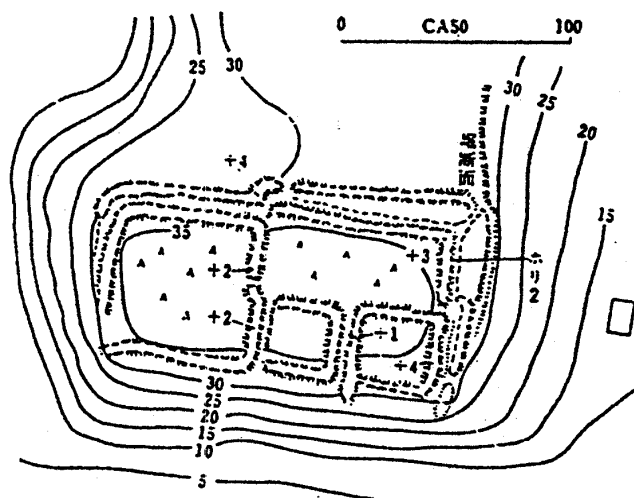


図10 小篠塚城址  
(伊礼正雄原図・高橋三千男協力)  
(注) (15) P.167より転載



写真 6 小篠塚城跡  
空掘と土塁あと  
(1995年2月筆者撮影)

いた。<sup>(11)</sup> 鹿島川をはさんで、大篠塚砦の対岸には大内城、小篠塚城の対岸には馬場城が建てられていた。

## 2. 7 上人塚古墳

一辺22.6m、高さ3.5mの方墳。北側および東側の一部分に削平を受けている。築造年代は古墳時代終末期と推定。未調査のため、埋葬施設、副葬品については不明。

佐倉市においては、方墳の遺存が比較的少ないため、本古墳の存在は貴重と考えられ、昭和41年に佐倉市指定文化財になった。

図1の11番、小篠塚八幡原遺跡の南端に位置する。

## 2. 8 小篠塚城跡

### 小篠塚城の特徴

1. 「折り歪み（おりゆがみ）」<sup>(12)</sup>「出枡形（でますがた）」<sup>(13)</sup>「喰い違い虎口（くいちがいのくちがいの虎口）」<sup>(14)</sup>

こぐち)」<sup>(14)</sup>の使用から、16世紀後半の築城の特徴を示している。

2. 平坦で広い面積の後背地が北側に広がり、まとまった人数を駐屯させる設備を備えていた。
3. この城がある場所からは、古くからの交通の要衝であった馬渡（まわたし）を見渡すことが出来る。
4. 中世においては、百姓と武士の区別はつきがたい。よってある時は、百姓達のたてこもりに使われたり、またある時は、本

佐倉城への入口を押さえる「在番の城」として機能した。

ほぼ完全な状態であった昭和42年（1967年）の伊礼正雄氏の調査報告では、次のように記されている。「この城は、郭の配置は基調としてはかなり古いが、種々の特長から推して、16世紀中期に改造されたもので、佐倉市中世城郭の中で、臼井城と共に、最も戦国盛期築城の特色を感じさせるものである。」「この城址は、保存が最も良いばかりではなく、色々の特色を備え、佐倉市内中世城郭中、第一に貴重なものとして、その保存に万全を期さなければならないと思う。」<sup>(15)</sup>

しかしながら、その後の20年間に急速に破壊が進み、1988年の調査報告では、次のように記されている。「本城跡の中でも一番の見所であった特徴ある虎口は、既に牛舎の建設にともない破壊されてしまった。伊礼図を参考に検討すると、喰い違い虎口の様相を呈していたようで惜しまれてならない。」<sup>(16)</sup>

遺構へ直結する道路はないが、少々無理をすれば登ることが出来る。<sup>やげん</sup>薬研状の堀、<sup>こしぐるわ</sup>腰郭、空堀、土塁の遺構をよく残しているが、牛舎建設による削平は復元困難である。文化財保存の重要性と困難さを目の当たりにした思いがする。まとまった人数を駐屯させたといわれる後背地は、現在は果樹園として使用されている。

## 2. 9 太田・大篠塚遺跡

佐倉市山王ニュータウン開発に先立って、発掘調査は昭和52年10月から昭和53年1月まで、まず確認調査として実施された。この確認調査の概報はまとめられたが、引き続き実施された本調査の報告は、様々な事情により記録保存に至らなかった。<sup>(17)</sup>

筆者は本学周辺の遺跡調査を進めていく内にこの事実に遭遇し、1994年12月、佐倉市教育委員会文化課に相談に行ったところ、「それでは今から本調査の報告書を作りましょう」と、快く引き受けていただいた。このようにして本調査報告書作成の約束ができた以上、「太田・大篠塚遺跡」に関する記述は、報告書が完成してから始められるべきであろう。どのような遺物・遺構が検出されたのか、その完成が待たれるところである。

なお、佐倉市教育委員会文化課の名誉のために一言申し添えておくが、このように発掘調査は行われたが何年たっても報告書が刊行されない例は、過去には全国で少なくなかった。その第1の理由は、調査費用はすべて「原因者負担」（開発業者）という原則のためである。第2の理由は、急増する開発に手が回らない事実がある。遺跡保護が地権者や開発事業者にかなりの犠牲を強いるかたちで行われながら、補償的措

置が不十分であることは、保護システム全体に大きなマイナスをもたらしている。押し寄せる開発計画をさばきながら、「きつい」「汚い」「危険」な3K職場、発掘現場での仕事はほんとうに激務である。

## 2. 10-11 太田新田遺跡・ 小篠塚八幡原遺跡

両遺跡とも土師器散布地として知られている。本格的な調査はされていないが、早春の耕されたばかりの畑では、土器の破片が散見される。

以上簡単に本学周辺の遺跡について紹介してみた。

さて、こうして調べたことを住民に知らせたり、さらに今後、共に調査していく場合、基本姿勢としてどのような立場や活用の仕方が考えられるだろうか。さまざまあると思われるが、筆者は、環境教育の一環として位置づけている。

次の章では、遺跡を環境教育の題材として、考察していく。

## Ⅱ 遺跡を題材として、環境教育 にどう生かすか

### 1. 遺跡が見せてくれる過去から学ぶ

環境教育を考えていくに当たって、ここではベオグラード憲章（囲み記事参照）を基礎として考察を深めていく。

#### ベオグラード憲章（1975年）

1975年10月、ユーゴスラビアのベオグラードで開催された環境教育専門家会議がまとめ

たバオグラード憲章がある。それは、環境教育の国際的規範として高く評価されているが、環境教育の目的を「環境とそれに関する諸問題に気づき、関心をもつとともに、当面する問題の解決や新しい問題を未然に防止するために、個人及び集団として必要な知識、技能、態度、意欲、実行力などを身につけた世界の人々を育てること」とし、環境教育の目標を、以下のように、関心、知識、態度、技術、評価、参加の6項目にまとめた。

- a) 関心：個人及び社会集団が、全環境とそれに関する問題に対する関心と感受性を身につけること。
- b) 知識：個人及び社会集団が、全環境とそれに関する問題、及び人間の環境に対する重大な責任や役割についての基本的な理解を身につけること。
- c) 態度：個人及び社会集団が、社会的価値や環境に対する強い感受性、環境の保護と改善に積極的に参加する意欲などを身につけること。
- d) 技能：個人及び社会集団が、環境問題を解決するための技能を身につけること。
- e) 評価できる能力：個人及び社会集団が、環境の状況を評価し、教育プログラムを、生態学的、政治的、美的、そして教育的見地から評価できること。
- f) 参加：個人及び社会集団が、環境問題を解決するための行動を確実にするために環境問題に関する責任と事態の緊急性についての認識を深めること。

つまり環境教育の目的とは、環境そのものあるいは環境問題に気付かせること、そして、現在と将来発生するであろう問題のために、必要な知識だけではなく実行力も身につけた世界の人々を育てることである。

環境教育が内包する分野は無限大であるが、教育理念は一つに集約できる。それは、地球市民教育とでも名付けられるだろうか。地球市民教育とは、有限な生態系地球で、生きとし生けるものがどのように共生していくのかを、体得し創り出していくこと、そのものを指す。

過去・現在・未来という時間を縦軸にとり、地理的距離を横軸にとってみると、今回取り上げた遺跡群は、地理的距離はゼロに近く、時間では過去に存在することになる。このことは、環境の題材としての特徴をよく表している。その特徴とは以下の二つである。

#### (1) 関心を呼び起こすのに適していること。

人々はどんな時関心を示すかという、時



写真7 遺跡見学会のようす  
熱心に説明を聞く参加者。

(1995年5月24日筆者撮影)

間と言えばなるべく現在に近く、身近な場所で、しかも目に見えることに最も関心を示す。遺跡をこの条件に当てはめると、過去という点では、思いを馳せるという一段階が必要なのでやや不利であるが、身近という点では非常に適しており、人々の関心を掘り起こしやすい題材と言える。

## (2) 歴史と文化に触れること

過去の生活ぶりをかいま見ることによって、人々は現在と未来の社会の性格を知ろうとする。そして我々が歩んできた道を探り当て、人間も自然の一員であることを認識する。例えば、縄文人が自然を収奪することなく、自

然の恵みの範囲でつつましく暮らしてきたことを知って、現在の大量消費を反省したりする訳である。ただし縄文時代は、人口も希薄で寿命も短命だったから可能だったわけで、現代人が生き延びるには新しい手法を創り出さなければならないところに問題が山積しているのだが。ともかくどのような未来を創っていくのかを課題とすると、遺跡は非常に豊富な事例をもたらしてくれる。

地球市民として世界の人々と共に歩もうとすると、文化・習慣の違いに直面する。それぞれの民族が何に価値をおいているのかを認識し、それを尊重することが求められるだろう。その際、自国の文化への明確な理解があってはじめて、

諸外国の文化の特徴も理解できるというものだ。遺跡は、我々日本人が何を大切にしていきたいのかを決定するときに、問題提起し重要な役割を果たす。国際化された社会の中で、何が大切で、何を継承していけばいいのかを自発的に考える訓練の場を与えてくれる。

非常に身近な狭い範囲の課題に取り組む場合でも、常にベオグラード憲章の精神を想起し、全体像にフィードバックしておきたい

## 遺跡見学会のご案内

佐倉市山王周辺は、古代よりずっと人々の暮らしがありました。過去の人々が残した‘足の下文化’に触れ、地域の歴史を学んでみたいと思います。

今般、(財)印旛郡市文化財センターのご好意により、遺跡見学会を催す運びとなりました。本学敷地内の古墳と、古墳そばで発掘された中世の横穴式墓を中心に、解説していただきます。お気軽にご参加下さい。

### 記

見学場所 大篠塚西台2号墳遺跡  
(物井ポンプ場より側道沿いに東へ100m)

開催日 5月24日(水) 雨天中止

見学時間 11時～11時50分(5分前集合)

解説 11:00～11:30

質疑応答 11:30～11:50

講師 (財)印旛郡市文化財センター  
調査研究員

主催 千葉敬愛短期大学 環境情報研究所  
地域研究員グループ

ものだ。

## 2. 実践報告

ニュータウンに移り住んだ人々の特徴は、その地域の歴史と文化に疎いということであり、疎いがゆえに知りたいという欲求も強いはずだということである。

今回の調査で驚いたことの一つは、埋蔵文化財をはじめとする様々な遺跡の存在さえも、ほとんど知られていないことであった。佐倉市役所の市政資料室へ行けば、『千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図』<sup>(18)</sup> (1,000円) が手にはいる。佐倉市内の遺跡の所在を詳細に調べあげたもので、これを見ると誰しも、おびただしい遺跡の数に圧倒される。関係者の苦勞に報いるためにも、啓蒙活動を推進し、住民の関心を高める必要がある。

この理念を実行に移すため遺跡見学会を開催した。

当日は、地域住民と学生合わせて約50名が参加した。(財)印旛郡市文化財センターの協力を得、詳しい資料を用意していただき、参加者全員熱心に見学した。遺構については前述しているので、ここでは省略する。この遺跡の場合、幸運にも仲間の地域研究員の住宅建設予定地だったので、地主としても開催に前向きに対処してもらうことができた。そしてさらに、近くの小学校にも紹介していただき、6年生の社会科の一環として活用されたことは、特筆に値する。なぜなら、地域への関心が波紋のように広がっていくことが、目的の一つだからである。

この遺跡見学会は、住民が地域への関心を持

つきっかけをつくった点で、大きな役割を果たしたことは間違いないであろう。

## 3. 地域との関わり方と「市民」育成について

上記のような見学会を今後につなげていくためにはどうしたらいいのか、検討してみたい。

開発に先立って行われる発掘は、記録保存されて大半が消滅してしまう。人々の目に触れないから、関心もわいてこないのが常であろう。例えば、学校や公民館などに出土品が数点だけでも展示してあれば、身近なものになると思われる。大きな博物館へ行けば、学術的にも貴重な出土品が展示してあるが、もっと身近な出土品を地元で見ることができれば、関心は否応なく広まっていくだろう。

小規模な現地説明会をひんぱんに開くために、学生ボランティアを活用できないだろうか。考古学を専攻する学生の力を大いに借りたいものだ。

ある地域研究員は、見学会のあと自分の子供を連れてもう一度現地へ行った。まだ小学2年生だが、子供にも見せてやりたかったからだそう。こうした経験が契機となって、将来大考古学者が誕生しないとも限らない。どんな分野でもフィールドワークが基本である。今や、宇宙から遺跡を探索する時代だが、現場を見ずして考古学者は生まれないことは誰の目にも明らかだ。

ここで『縄文人は生きている』<sup>(19)</sup>という本から、小学6年生の体験学習の感想文の一説を引用してみたい。

「ござ作りーすすきの葉をたがいちがいに組み合わせた。なるべく一日で完成させないと、すぐかわいてパリパリになる。できても、時々水をかけた。草がこんなに早くしなびるとはしなかった。」<sup>(20)</sup>

「ほくは木の皮をはぐ石器をつくった。何回か失敗した後、いがいとうまくけずれて出来た石器だったが、木の皮がとれやしない。とても一生けんめいけずったのにとれやしない。縄文人はいっぱい失敗やくろうして、ほくたちにいいものを残してきたのだらう。」<sup>(21)</sup>

筆者も古代人の暮らしそのものに迫ろうと努力しているところだが、この子どもたちにはかなわない。体験学習の良さをもう一度見直す時期に来ているような気がする。

遺跡の調査を通じて一番感じたことは、地域には地域の情報を集約し発信するコミュニティセンターまたはそれに準ずるものが必要だということだ。埋蔵文化財関係者は多忙を極め、筆者のような一住民に対して、組織として対応するには制約が多い。また既存組織の持つ情報は、地域を中心にあらゆるところに伝達されるのでなく、組織内を上下することが多い。住民が気楽に立ち寄って、わからないことを調べたり、催し物の情報を得たりできる場があれば、「地域の個性化・活性化」にどんなにか役立つことだろう。しかもそれは、硬直した縦割り社会を溶きほぐし、ヨコのつながりを強め、地域ネットワーク作りに貢献する。

こうしたことを実現していくためには、住民自身の自覚が不可欠だが、実際のところ困難が多い。なぜなら、佐倉市には、納税者は大勢いるが「市民」が育っていないからだ。「市民」

とは、「自発的・主体的に政治に参加する人々」を指す。住民の行動形態は、傍観→参加→参画と進んでいくわけだが、傍観あるいは参加にとどまっている者が大半である。選挙で投票するというのは参加の一形態だが、1995年4月の市長選挙の投票率は、新人3人の争いで注目されたにもかかわらず、56.1%の低率だった。自らの一票さえも投じない者には地域云々と言える資格はないのである。労働省の勤労者福祉研究会の報告書でも、「家庭や地域活動など職場以外に重点を置いた生活が大切と指摘」<sup>(23)</sup>されている。まちづくりにはそれなりの時間がかかるのだから、暇になってから批判を並べても手遅れとなる。

地域を知り、何に価値を置き、何を継承していくのかを、自らの目で見極め決定し主体的に行動できる「市民」になることが、すべての住民に求められている。

## おわりに

考古学の専門家でもない筆者が、遺跡の調査をして歩くのは非常に困難を伴った。ただひたすら地域への関心という一点で、継続できた次第である。よって見当違いの箇所もあるかも知れず、専門家の指摘を待ちたい。

本学周辺の遺跡に関して、本稿で取り上げたのはほんの一部である。少し範囲を拡大すれば、数珠つなぎにつながっている。拙稿がきっかけとなって、調査研究される方が増えることを願っている。

筆者は、住民の地域への感心を喚起するというのを念頭に置いて行動しているが、当たり



前とはいえ、今回の調査で最も啓蒙されたのは筆者自身であった。学校で学習する内容は、知識体系そのものであるため、本人の興味とはかけ離れている場合が多いのではないだろうか。今回の調査は、「本学裏の斜面林内に古墳がある」という噂が出発点だった。(財)印旛郡市文化財センターへ飛び込んでみると、ちゃんと測量され名前も付けられていることに驚いた。そして今度は関係書を探し始めたが、古くて発行部数が少ない書籍が多く、簡単に手にすることが出来ず苦労し、様々な方々に助けられた。犯人を捜す刑事ではないけれど、古墳には何回も足を運んで、乏しい知識ながら当時の様子を想像してみた。そうしている内に、古墳ふもとで、仲間の地域研究員の住宅建設に先立つ発掘調査が始まったのである。最初は佐倉市教育委員会文化課の担当だったため、発掘そのものにも参加させていただいた。体力がないため、わずか2日でリタイアしたが、筆者にとっては貴重な体験だった。こうした一連の動きが、遺跡見学会開催へと結実していったのである。

「興味がある」「知りたい」という小さなトンネルから出発すれば、興味が尽きることはないし退屈することもない。一つのトンネルを抜けると、また次のトンネルに行き当たる。長いトンネルが、次々と待ちかまえている。最終的には、「ほんとうのところはわからない」という迷路に行き着くものらしい。しかし、筆者のように一住民として余暇を利用して続ける場合は、どこまで行くかに決まりはないのだから、「楽しむ」ということを忘れたくないものだ。今回もミステリーを解いていくような興奮と楽しさに満ちあふれていた。

この「楽しみ」を経験する人が増えることを願っている。そして結局は知らず知らずのうちに、「楽しみ」の伝播が、啓蒙そのものを担ってくれるような気がする。

## 要 約

佐倉市山王周辺に目を向けてみると、古代や中世の遺跡が点在していることがわかる。

大篠塚西台1・2号墳、大篠塚第2号墳、人形塚、上人塚などの古墳群をはじめとし、東関東自動車道建設に先立ち発掘された古墳時代—平安時代までの住居址、大篠塚砦跡・小篠塚城跡などに代表される中世の城跡などが、舌状台地の先端部と縁部に散見できる。

これらの遺跡は、古代より連綿と人々の生活が営まれてきたことを明確に物語ってくれる。

次に、これらの遺跡を環境教育の題材として取り上げてみる。環境教育の基本理念は、ベオグラード憲章で宣言されたように、地球市民教育にある。有限な生態系地球上で、人間も含めたすべての生物が共生していく道を捜し、創り出していくことである。

この視点から遺跡を考察してみると、二つの特徴があることがわかった。一つは、地域に密着した題材なので、地域住民の関心を引き起こすのに適していること。もう一つは遺跡が歴史と文化そのものであること。自国の歴史と文化を理解できるようになり、地球市民として成長できる。また、過去を学ぶことによって、未来への継承に貢献できるのである。

環境教育の一環として、地域住民を主たる対象とする遺跡見学会を開催した。今後も、地域住民の関心を高めていくために、さまざまな働

きかけが必要である。そのためには、各方面の協力が不可欠であると同時に、住民自身にも、傍観→参加→参画と主体的に行動できる「市民」としての自覚が求められている。

## 謝 辞

○佐倉市山王周辺に注目するという貴重な示唆を与えて下さいました、本学中村圭三教授に感謝します。

○遺跡調査において、行き詰まる度に適切なご指導下さいました木内達彦氏（財）印旛郡市文化財センター）に感謝します。

○考古学の基本と魅力を教えて下さり、文献入手に便宜をはかって下さった三浦和信氏（千葉県立中央博物館）に感謝します。

○佐倉市山王開発以前の地図などの入手に、快くご協力下さいました奥田幸甫氏（中央商事株）に感謝します。

○以下の機関と仲間の地域研究員にお世話になりました。ここにお名前を記し、謝辞とします。

佐倉市教育委員会文化課

（財）印旛郡市文化財センター調査課

（財）千葉県文化財センター図書館

高宮 律子    並木 尚江    河辺 結花

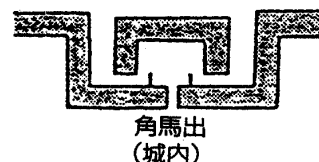
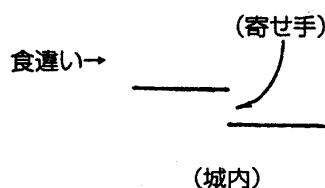
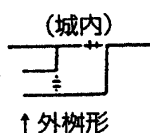
三浦 朋子    斉藤 房江    鈴木 仁美

浅井 優子

最後に、遺跡を捜すために、道なき道を共に歩いてくれた家族に感謝します。

## （注）

- (1) 『大篠塚西台 2 号墳遺跡現地説明会資料』  
 （財）印旛郡市文化財センター作成（後述する遺跡見学会々場で配布された資料）
- (2) 『佐倉市史民俗編』昭和62年 PP. 522—523
- (3) 栗本佳弘ほか『東関東自動車道（千葉—成田線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会、1970年参照
- (4) 『前掲書』P. 45
- (5) 根郷公民館郷土史講座編『根郷風土記』  
 佐倉市立根郷公民館、昭和56年、P. 71
- (6) 注(3)に同じ
- (7) 『前掲書』P. 107
- (8) 『前掲書』P. 92
- (9) 『前掲書』P. 225
- (10) 『根郷風土記』P. 74
- (11) 『前掲書』P. 78
- (12) 堀をまっすぐに築かず、あちこちをまげてクランクを設け、敵が攻めにくくしたもの。
- (13) 虎口の防御施設の一つで、塁で囲って四角くした区画。敵の直進を防ぐことに加え、出撃の際に、四角い空間に城兵を待機させる武者溜の機能も果たす。
- (14) 城の虎口（出入口）で、左右の土居が喰い違いになっているもの、喰い違いの度が大きいと土居の末端が重なり合うので、外から入ると出張った土居にぶつかって、右か左の虎口幅以上に曲がらなければならない。



- (15) 『佐倉市史巻一』 佐倉市、1971年、PP. 167  
—169
- (16) 『千葉県佐倉市中世城跡測量調査報告書』  
佐倉市教育委員会、1988年、P. 20
- (17) 田川 良、千田利明『太田、大篠塚』  
日本文化財研究所、1978年
- (18) 『千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図』 佐倉  
市教育委員会、1984年
- (19) 戸沢充則編『縄文人は生きている』 有斐閣、  
1985年
- (20) 『前掲書』 P. 101
- (21) 『前掲書』 P. 103
- (22) 渡貫博孝佐倉市長の公約の一つ。  
「市長就任のごあいさつ」 こうほう佐倉

No733 1995年 5 月15日号

- (23) 「家庭・地域に重点置いて」『日本経済新聞』  
1995年 5 月22日付

## 参考文献

- ・田村言行「佐倉と考古学その三」『佐倉市史  
研究第 5 号』  
佐倉市史編さん委員会、昭和61年
- ・『佐倉の歴史を学ぶ資料集』 佐倉市立中央公  
民館、平成元年
- ・椎名慎太郎『遺跡保存を考える』 岩波新書、  
1994年
- ・門脇禎二編『日本生活文化史第 2 巻』